

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：35308

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22590616

研究課題名（和文）ヨルダン南部定住ベドウィンの人口再生産・生産/消費・健康に関する調査研究

研究課題名（英文）Effects of Population Dynamics on Reproduction/Consumption and Health among Sedentarized Bedouin Clan, South Jordan

研究代表者

末吉 秀二（SUEYOSHI SHUJI）

吉備国際大学・社会学部・准教授

研究者番号：80330629

研究成果の概要（和文）：ヨルダン南ゴールにおいて 1950 年頃に定住した 2 つのクランを対象とした家系人口調査をもとに、本研究は、定住の初期（1950-69 年）、中期（1970-89 年）、後期（1990-2009 年）における年平均人口増加率が、0.040、0.041、0.036、および 0.039、0.042、0.036 と定住初期から中期にかけて上昇し、中期から後期にかけて減少したことを明らかにした。しかし、両クランともに 2030 年には人口が 2 倍になることが予想されることから、生存適応を脅かす過剰人口に対する方策の必要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：Based on a genealogical-demographic research, targeting two clans sedentarized in South Ghor, Jordan in 1950, this study clarified that annual population growth rates in the early (1950-69), middle (1970-89), and late (1990-2010) periods after settling down were, respectively, 0.040, 0.041 and 0.036, and 0.039, 0.042 and 0.036, suggesting the increase from the early to the middle periods and the decrease from the middle to the late periods. However, it is estimated that their population will double by 2030, implying the urgent necessity to prevent overpopulation that threatens the people's subsistence adaptation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
22 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
23 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
24 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：社会医学・公衆衛生学、健康科学

キーワード：家系人口学 ヨルダン アラブ・イスラーム社会 ベドウィン

1. 研究開始当初の背景

20 世紀は地球規模で遊牧民の多くが定住（sedentarization）した時代であり、環境の変化、人口増加に伴う放牧地の荒廃、農耕へ

の依存の高まり、政策介入などがその要因と指摘されている。

今日、定住ベドウィンで形成された多くのアラブ農村社会は、人口増加に伴う社会経済

的貧困問題を抱えている。しかしながら、定住後の農村社会の変遷過程に着目し、かつ詳細なデータに基づく研究は殆ど行われていない。

遊牧から定住の過程において生じる生業活動および食物摂取パターンの変化は、意図的な出産抑制がない（自然出生力）集団においては、母子の栄養状態および産後の不妊期間をとおして出生および死亡に代表される人口動態に影響を及ぼす。先行研究の多くは、遊牧から定住にかけた死亡率の低下が人口増加を促す大きな要因とするが、出生率の変化に関しては明らかな結論を得るには至っていない。その主な原因は、先行研究の多くが横断的データに基づく分析研究であること、出生率に関する地域/集団間の変動が大きいことにあり、アラブ遊牧民として特有の生存様式をもつ集団の定住後の変遷過程を含む縦断的研究が求められている。

2. 研究の目的

本研究は、定住したアラブ系遊牧民（ベドウィン）を対象に、フィールド調査により人口再生産、生産（生業活動および資源利用）、消費に関する体系的データを収集し、①長期間にわたる定住化の過程における定住ベドウィンの人口再生産メカニズムを明らかにすること、②人口再生産・生産/消費の視点から、今日急速な近代化が進行するアラブ農村社会が直面する諸問題の原因を明らかにし、その解決のための方策を示すこと、③定住ベドウィンの生存様式を理解しながら、持続可能な開発計画を策定するための基礎資料を提供することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 調査対象地の社会経済的時代区分

本研究対象地域である南ゴール郡は、ヨルダン溪谷の農業地帯の南端に位置し、年間平均気温 25.5℃、年間平均降雨量 150 mm の極乾燥地域に属する。行政的に 5 村から成る南ゴール郡のうち、人口約 19000 を有するアル・サフィ村が本研究対象地である。歴史的に、アル・サフィ村の人々は、1950 年頃（1948 年に勃発した第一次中東戦争の前後）の定住者の末裔である。

生態学および社会経済的時代背景により、研究対象地は、定住の初期（1950-69 年）、中期（1970-89 年）、後期（1990 年以降）の 3 期間に区分でき、生態人類学的に重要なターニングポイントとみなすことができる。

- ①定住初期：ヒツジやヤギの飼育に依存しながら定住し、農耕を開始した時期。
- ②定住中期：生業パターンが農耕への依存を高めた時期。
- ③定住後期：1980 年代後半から地域開発計画（幹線道路の整備、医療施設・小中学校の設

置、灌漑設備の敷設など）が実施され、近代化が進行する時期。

(2) データの収集

家系人口分析は長期的な人口指標の推定に有用である。しかし、調査対象者の記憶の欠如・誤謬に起因するデータの不正確さが指摘されている。アラブ・イスラーム社会は伝統的に部族社会であり、父系をとおした血族の概念が極めて強い。また、個人の名前の次に、父親の名前、そして父方祖父の名前がくる父系名称システムが維持されており、この 3 世代の姓名から個人を同定することが可能である。本研究では、行政機関が記録・管理する出生/死亡・婚姻に関するデータを入手し、それをもとに調査協力者とともに 7~8 代まで遡った系譜を復元した。

調査は 2010 年度、2011 年度、2012 年度の 3 月および 8 月の年 2 回、計 6 回行った。調査年度ごとの調査内容を表 1 に示した。

表 1 調査年度ごとの調査内容

	2010 年	2011 年	2012 年
記録・資料の収集	○	○	
フィールド調査			
①説明会の開催	○	○	○
②聞き取り調査	○	○	○
③戸別訪問		○	○

○は実施を示す。

2010 年度調査においては、首都アンマンの市民サービス旅券局（Civil Services and Passport Department）が管理する出生/死亡・結婚に関する記録を、2011 年度調査においては南ゴール郡の市民サービス旅券局において管理するイギリス統治時代（1946 年以前）の出生/死亡記録を入手した。

フィールド調査の内容は以下のとおりである。

- ①説明会の開催：2 つのクランの長および宗教指導者等関係者から調査遂行の協力を得るための説明会を開催した。
- ②聞き取り調査：入手した記録をもとに述べ人数 60 名の調査協力者とともに親族関係に関する確認作業を行った。この作業はデータ間の齟齬がなくなるまで執拗に繰り返し行った。また合わせて生業に関する聞き取りを行った。
- ③戸別訪問：記録に記載がなく記憶が曖昧な個人の同定、出生/死亡年、および婚姻形態（クラン内婚や一夫多妻婚）については、個別訪問により確認した。

4. 研究成果

(1) 長期的人口変動

①人口増加

Al-Ashushu クランについては 5097 名、

Al-Bawart クランは 3134 名の個人を同定し、その親族関係を明らかにした（クラン外婚により転入した女性を含む）。Al-Ashushu クランの始祖は 1760 年頃、Al-Bawart クランの始祖は 1800 年頃の出生と推測された。

図 1 に 2 つのクランの人口増加を示した。各年の人口はアラブ・イスラーム社会におけるクランへの帰属意識を踏まえ、出生と死亡の差（および累積）によって求めた。人口増加曲線は指数関数に良くフィットしており（ R^2 値は Al-Ashushu クランで 0.996、Al-Bawart クランで 0.988）、両クランにおいては、*出生制限が極めて限られていると判断*できる。

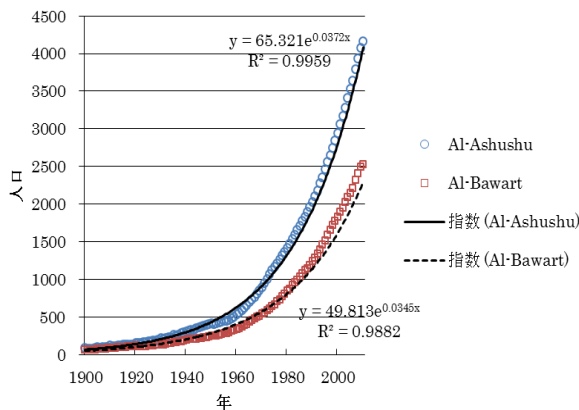


図 1 Al-Ashushu クランおよび Al-Bawart クランの人口増加と近似曲線

② 年平均人口増加率

図 2 に定住の初期、中期、後期の 3 期間における年平均人口増加率を示した。

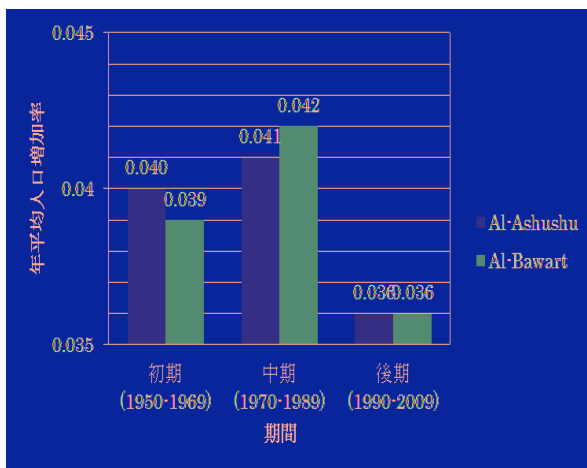


図 2 定住初期、中期、後期の 3 期間における Al-Ashushu クランおよび Al-Bawart クランの年平均人口増加率

各期間の年平均人口増加率 (r) は以下の間欠的増加率の算定式を用いて計算した。

$$r = 1/t \cdot \ln(N_2/N_1)$$

[N_1 : 期首人口 N_2 : 最終人口 t : 期間年数]

Al-Ashushu クランおよび Al-Bawart クランの 1950 年、1969 年、1989、2009 年における人口は、それぞれ 400 と 245、886 と 538、2012 と 1238、4143 と 2526 であった。したがって、定住初期、中期、後期における年平均人口増加率は、Al-Ashushu クランが 0.040、0.041、0.036、Al-Bawart クランが 0.039、0.042、0.036 であり、両クランともに僅かではあるが、人口増加率は定住初期から中期にかけて上昇した後、中期から後期にかけて減少していた。しかしながら、両クランともに定住後期の人口増加率は 0.036 と極めて高く、今後この人口増加率を継続すると 2030 年には人口は 2 倍になることが予想される。この継続的な人口増加は彼らの生存適応を脅かす過剰人口と判断されることから、早急な対策が示唆される。

一方、2009 年における両クラン間には人口規模の著しい違いが見られた（例えば、Al-Ashushu クランは 4602、Al-Bawart クランは 2526）。その原因として考えられるのは定住時の人口規模の違いであるが（例えば、Al-Ashushu クランは 400、Al-Bawart クランは 245）、今後、出生/死亡および婚姻形態などのデータを詳細に検討する予定である。

(2) 本研究の学術的インパクト

本研究は、人口動態データが限られているアラブ・イスラーム社会において、家系人口学の方法を用いて農村社会における長期的人口変動を明らかにすることを目的の一つとした。

アラブ農村社会を対象とした人口学に関する先行研究の多くは、定住のステージの異なる集団を横断的なデータに基づき調査分析するにとどまっている。しかし、今日のアラブ農村社会における人口増加に伴う社会経済的な問題を十分に理解し、その解決を図るためには、長期的な社会の変遷過程とともに人口動態を明らかにすることが重要であり、本研究は貴重な資料を提供すると考える。

(3) 今後の展望

① データの信頼性

データの信頼性を検証するために 1950 年以降の出生性比を表 2 に示した。

表 2 1950 年以降に出生した男性・女性数および出生性比

	男性	女性	性比
Al-Ashushu	2212	1877	118
Al-Bawart	1323	1191	111

両クランともに出生性比は 105（時代や地域に関わらないヒトの概ねの性比）を上回っ

ている。その原因の一つは他のクランとの婚姻により転出した女性の欠落と考えられる。

データの信頼性を高めるために市民サービス旅券局から Al-Ashushu クランおよび Al-Bawart クラン両クランの既婚女性のリストを入手する予定であったが、最終年度の調査までに間に合わなかった（現在は入手済）。

今後は入手したデータをこれまで作成した系譜データと照合することによってデータの信頼性を高める予定である。

②データ収集の限界

本研究においては、人口動態に関するデータに加えて、資源利用に関するデータ、健康に関するデータの収集を計画していた。しかし、調査対象クランの人口が申請当初に予想していた人口よりも多かったこと、婚姻形態が複雑だったこと（例えば男性におけるクラン内婚と一夫多妻婚の割合が Al-Ashushu クランでは 50.3%と 10.3%、Al-Bawart クランでは 42.8%と 10.3%）から、系譜データの確認作業に多くの時間を費やすこととなり、2つのデータを収集することができなかった。

しかしながら、上述したように体系的データの基礎となる系譜データを収集できたことから、今後、そのデータに加えていく予定である。

③詳細なデータ分析

今後は定住後の生業の変遷、アラブ・イスラーム社会に特有な婚姻形態などのデータをもとに、人口動態に影響する要因を詳細に分析する予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 3 件）

①末吉秀二「ヨルダンにおける小集団人口学の事例：系譜復元による人口増加率の分析」
日本人口学会 2014 年 6 月（東京）

②末吉秀二「父親の名前をとおした血族関係の家系人口研究：南部ヨルダンの高出生力アラブ集団の事例」人類生態学研究会 2013 年（東京）

③末吉秀二「アラブ・イスラーム社会における家系人口学調査-南ヨルダンに居住する定住ベドウィンの事例-」日本民族衛生学会 2012 年（札幌）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

末吉 秀二 (SUEYOSHI SHUJI)
吉備国際大学・社会学部・准教授
研究者番号：80330629

(2) 研究協力者（海外共同研究者）

アブドウルモネム・メルカウィ (Abdulmonem Malkawi)
ヨルダン上級人口審議会